

の弓神

瀧澤春

表紙イラスト・秋月からす

舞狐姫

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『神弓の舞狐姫』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



神弓の
舞狐姫

瀧澤春

表紙 / 秋月からす

登場人物紹介

Characters

くずはしの

葛葉紫乃

巫女と妖狐との間に生まれた退魔巫女。普段は淑やかな大和撫子だが、気持ちが高まると狐の耳と尻尾が生え、凶暴化してしまう。

おおたきさくら

大炊咲楽

紫乃の後輩。心優しい少女。

ふかくさ

深草

かつて紫乃の母親を奪おうとした妖魔。

やっぱり後ろには誰もいなかった。

O Lは疲れているのだろうか、臉を揉んだ。さつきから誰かに跡をつけられているような気がしたのだ。

でも今まで何度振り返っても人影らしいものは見受けられない。夜中、会社帰りの女性にとつて夜道ほど、背筋の寒くなる場所はない。きつと不安がないはずの気配を感じさせるのだ、今日は早く寝よう、と女は思った。

それによく考えてみればここは等間隔に配置された外灯一つ一つの輝きは弱々しいが、道幅が狭いから、十分に周りを照らしている。不審者が背後に寄れば、影が教えてくれるだろう……。

女性はやや早足に歩き始めた。

「きやつ」

歩き始めてすぐ、女は誰かに足を取られたように躓つまずく。見ると、ハイヒールの踵が折れていた。

「もう何なのよっ！」

腹立ち紛れに踵の折れたハイヒールを壁に投げつける。無性に腹が立ってきた。

もうイヤあと、女は弱々しく呟くと、虚しく転がったヒールを手を取った。

グヒヒヒヒ……。

その奇妙な『音』に、女は後ろを振り返る。

途端それまで煌々と輝いていた外灯が消えた。

井戸の底のような、ネットリとした闇が目の前に広がる。

グヒヒ、ヒヒヒ。

「だ、誰かいるの!？」

それは空耳ではなく、『音』でなく、間違いなく嗤い声。それも一つではない。少なくとも二つ以上の嘲弄だ。

女性は眼を闇に向けたまま後退る。

グヒヒヒ、ニガサンゾオオオオッ。

女は自分の肩に手が乗せられるのを見た。

「ひい……!」

女性は眼を見開いた。なぜなら自分の影が立体的に伸び上がると、手の形となって肩を掴んできたのだ。

「ひゃあっ!？」

驚くが早いのか、女は足を掬われ、倒れてしまう。

ウマソウダ。ウマソウダ。ウギギギギ。

その声は周りの闇から、足下の影から聞こえてきていた。

「いやああああっ！」

倒れた女性めがけ、伸び上がった幾つもの影が手の形となって、襲いかかってくる。ビリッ、ビリリッ！

女性のリクルートスーツがまるで埃でも払うかのように、易々と引き裂かれていく。しかし当の女性本人にとっては、全くそれに対する現実感がない。

人の姿なんてない。影がどうして服を裂くの——夢を見ているのだろうか？
現実と夢想との感覚が薄弱となり、女は啞然とする。

「あっ、ああっ」

そしてほとんど裸に剥かれてから、ようやく恐怖が追いつき、今自分の身に降りかかっていることが決して夢でないことを知る。だが遅かった。

「あ、アア……」

影は女の柔肌を揉み始めていた。影の愛撫は巧みだった。無数に伸びる手の群れ。それが恐怖で戦慄する女体を確実に火照らせる。

女は路上で仰向けのまま身体をくねらせ、アハアハと好色な吐息を漏らす。

巧みな愛撫に、女は髪の毛を掻きむしり、目元を赤く染め焼かす。スカートが捲れ、シヨーツの船底には笹型の沁みができ上がっていた。影の正体——妖魔たちの出す淫氣に当てられ、すっかり女の官能は狂わされていたのだ。

欲シイカ、欲シイダロ。ウゲゲゲ……。

「アアン、ほしい。おま〇こ、してエ……」

女の鼠蹊部に触手状の影が押し当てられる。船底をスーッと撫でられるだけで、女の全身に淡い痺れが走った。ぐぢよぐぢよに濡れそぼった下半身を、クイクイと持ち上げ、女はさらなる快楽を欲する。

「はやくつ……アアツ……はやくウツ」

すでに女の瞳は蕩け、おぞましさに怯える様子は一片も見られない。

墮チタ、墮チタゾ。グギャギャギャ。

影たちはほくそ笑む。後は女の媚肉をたっぷり味わい、絶頂と同時に生気をいただけばいいのだ。

イクゾ、イクゾ。

影の先端がショーツを横へずらし、露わになったベトベトな肉スリットの中へ潜り込もうとしたその瞬間。

グギャアアア!?

それまで不快な嗤いしか口にしなかった影が断末魔の悲鳴を上げたのだ。同時に、無数に伸び上がっていた影手の幾つかが消えてなくなる。

「そこまでよッ、妖魔ども」

重い暗闇の中、その存在をかき消されることなく、鈴鳴る軽やかなソプラノ。

影たちの注意がそちらへ傾く。そこには少女が独り立っている。

緋色の馬乗袴に白の小袖——いわゆる巫女姿の女だった。

巫女服の少女——紫^し乃は安堵の息をつく。どうやらあの女性はまだ妖魔と契っていないらしい。しかしそれでも油断できない。

妖魔と接触しただけで、身体の弱い人間は死んでしまう危険があるのだ。

少女は草履の鼻緒を挟む足指に力を入れ、一步踏み出した。辺りに充満した淫らで、圧迫感のある妖気に肌が痺れる。

クッソツ、誰ダツ!!

妖魔たちは折角の食事を邪魔され気が立っているらしかった。凄まじい唸^{たけ}りを上げる。

しかし紫乃は怯むことなく、左手に持っていた弓を持ち上げた。その時もし第三者がその光景を見ていれば、きつと首を傾げただろう。

紫乃が構えた弓、それには弦がピンツと張られ、弓に使われている材質も立派なものだと分かる。だが彼女の右手には、弓と対を成すべき矢がないのだ。それでも少女は、さも矢があるかのように弦を引いていた。

グゲゲゲゲ。マズハオ前カラ生氣ヲ吸ッテヤルウウウツ!!

何十という影手が、紫乃めがけ襲いかかってくる。

「闇よ、無へ帰りなさいっ！」

少女は教え諭すような精練の声でそう言うと、たつぷり影手を引きつけた状態で、キリキリと引き絞っていた弦を弾いた。

途端。眩いばかりの聖光が辺り一面に広がったかと思うと、まるで稲光のような鋭い閃光が道路と平行にまっすぐ迸ったのだ！

ギャアア——！

闇の触手群が瞬く間に光に呑み込まれ、眩さが収束していくと同時に、辺りに漂っていた淫らな気はたちまち浄化される。

辺りは再び閑静な住宅街の様を取り戻す。等間隔に配置された外灯は再び点灯し、何事もなかったような平穏が再び横たわる。

紫乃の持つ神弓に物質的な矢は存在しない。自らの清い霊力を以て矢とするのだ。

少女は、衣服を裂かれ仰向けで昏倒している女性に歩み寄る。口元に手を翳す。掌に息がかかってこそばゆい。

巫女少女は厳しく真一文字に締めていた口元を安堵に緩めた。

（よかった。少し生気が奪われたようだけど、命に別状はない……）

紫乃は立ち上がりながら、すっかり静寂を取り戻した世界を見回した。

文明が発達すること、生活が便利になればなるほど人の欲望は際限なく肥大化していく。それに伴って、その欲を餌にして生きる妖魔たちの動きも活発化している。ここ一週間ですでにどれほどの妖魔を相手にしてきたことか。どれも動物霊が悪霊化した程度の下級妖魔だが、退治した数は両手では足りない。それも幾ら下級妖魔でもこれほど集中的に、これほど大量に発生するのは今まで前例がない。

この街に何かが起きようとしているのではないか——。
少女の胸中を、一抹の不安が過ぎった。

F 県庁所在地から北に寄った御橋音市^{おきつねし}。

人口数千の小都市であるその街並みを見下ろすように、街の南側に小高い山がある。山の真ん中を貫くように設けられた五百段あるという石段。そこを登り詰めた先に古ぼけた鳥居、さらにその奥には社殿がある。

江戸時代の昔より、この地の霊脈を押さえ、鎮護の要となっている葛葉神社^{くずは}だ。

その境内から、サツサツサツと小気味のいいリズム音が流れてくる。

葛葉神社の唯一の住人にして、唯一の巫女、葛葉紫乃が竹箒で石畳を掃き清めているのだ。緋色の馬乗袴——武道をするとき等に穿く股下からズボン状の袴——に、白の小袖という巫女装束で、腰まで届く艶やかな緑の髪を和紙で束ねている。その穏やかで、落ち着

いた雰囲気は十代にして母性の成熟を物語っていた。

紫乃を見る人は誰でも、その少女の神々しさにハッと息を飲む。整えられた小顔の輪廓に、陽光を映して輝く色白の肌。眉は濃くキリツとして、二重瞼に縁取られた黒瞳は波紋一つない湖面を思わせる。その瞳で上目遣いされれば、同性異性問わず頬を染めることになるだろう。化粧気のない顔は彫りが深く、エキゾチックな艶をそこに見いだせる。

そしてその容姿と同じく人目を集めるのは、その抜群のプロポーションだ。小袖の胸元を注意深く掻き合わせているため、必要以上に胸が圧迫され、そのたわわな乳肉の輪郭がありありと浮かびあがる。ウエストは折れてしまいそうなほどにキュッと窄まり、八頭身の黄金律が少女の日本人離れした印象を一層強めていた。

それは清楚な衣装では隠しきれず、神に嫉妬してしまいたくなる。

生まれたてを思わせる無垢な美しさを持つ少女と、神社という聖域の神々しさは、まさにピッタリの組み合わせと言えた。

その神社に紫乃は独りで住んでいる。両親は紫乃が中学の頃に亡くなっている。彼女の両親も、昨夜の彼女のようにこの街を脅かす、妖魔と戦う退魔師だ。しかしその戦いのさなか二人は重傷を負い、鬼籍に入った。妖魔との戦いの結果が生んだ悲劇だった。

当初、彼女を引き取ろうと様々な人が紫乃へ養子の提案を出した。それでも少女はこの神社を捨てなかつた。確かに両親はいない。それでも自分の血の中に両親はいるのだ。こ

の神社を守護し、そしてこの街を守る——それは少女へ課された使命であり、天命なのだ。——と、テンポいい竹箒の音に混じり、タン、タン……とヤケに鈍重な音が混ざる。

紫乃は手を止め、石段の方へ視線を注ぐ。

すると丁度石段を登り詰めた少女の姿が見えた。こんな朝早く誰だろうと紫乃は思ったが、少女の特徴的なツインテールが見えると、合点がいったように目元に嬉しさをにじませた。

「珍しいわね。お寝坊さんがこんな早くに」

「うー。先輩、ひどいですよ……はあー疲れたあつ」

紫乃はウソよ、ウソ、とにつこりと微笑む。

ツインテールの少女は^{おわたきさくら}大炊咲楽。紫乃が通う学校の一年後輩で、同じく紫乃が主将を務める弓道部の後輩でもある。二人の関係はただの先輩後輩ではなく、親友というべき間柄で、互いの家の行き来も頻繁だ。

「でも本当にどうしたの？ ……宿題かしら？」

咲楽の家庭教師役を、紫乃はちよくちよく請け負っていた。

「その前に先輩っ、み、水をお……！」

呻く少女に、紫乃は苦笑いした。

それからは咲楽は、紫乃が持つてきた温めの麦茶をたつぷりコップ三杯飲み干し、日陰になつてゐる社殿にごろんと横になつた。

朝食がまだだと言うので、丁度掃除が一段落した紫乃が二人分の朝食を作り、それからお昼も一緒にとつた。

「咲楽。何か私に用事があつたんでしょ？」

紫乃は食器を片づけながら、洗つた食器を拭く咲楽に聞く。しかし咲楽はまるでそれが聞こえていないかのように、

「あ、先輩知つてました？ 黒谷先輩が——」

と、いつの間にか紫乃と同じクラスの男子が咲楽の友人に告白して撃沈したという話にすり替えられてしまう。それから紫乃と咲楽はああでもない、こうでもないと言つて話をしつゝ日を過ごす。その間何度となく紫乃は咲楽がここへ朝早くやつてきた理由を聞いた。でもそのたびに咲楽は話を逸らすのだ。夕方になつて咲楽はそろそろ帰りますと言つた。結局彼女が朝も早く心臓破りの階段を上つてきた理由は分からず仕舞。

「ねえ、咲楽。結局私に用事あつたの？」

普通なら独り寂しく社務をこなしていた日曜を、楽しい時間を過ごせたとはいえ、喉に小骨が挟まったようでもうどうにもそれが気になつてしょうがなかつた。すると、咲楽はにっこり笑つて振り返る。

「用なんてありませんよ、別に。……先輩最近なんか暗かったから。心配事、本当は聞いてあげられたらよかったですけど」

咲楽は気恥ずかしそうにうそぶく。

「私、馬鹿だから。そういうの解決できそうにないし。だから先輩に少しでも楽しい時間を過ごしてもらおうって、それで……あの、ご迷惑、でした？」

咲楽は判決を待つ被告人のように、紫乃の顔を窺う。

紫乃はそうか、と口元を綻ばせる。首を振り、今日が楽しかったことを告げる。

最近沈んでいたのは、妖魔のことを考えていたからだ。それが後輩に気遣いをさせてしまったのを考えると、紫乃は申し訳なくなってしまう。

「ありがと、今日はすごく楽しかったわ」

もう一度紫乃は自身の言葉を一語一語噛みしめるように言った。

「あ、はい！ えっと、今日はごちそう様でしたっ。それじゃ、さようならっ！」

咲楽は満面の笑みで大きくお辞儀をして、石段を下っていく。小柄な体軀には少し長めのツインテールが一緒になって跳ねる様はとてもかわいらしい。

（後輩を心配させるなんて、私……ダメな先輩ね……）

葛葉神社から夕焼けを望みながら、少女は大きく伸びをした。

それから一時間後。

『もどかしい』

その言葉の罪深さを紫乃は身を以て知ってしまった。

全く変化のないブラという装着具。いつしか乳首の擦過を物足りなく感じていた。この赤々と膨らんだ乳首を、誰かにもっと強く捏ねあげて欲しい……。

少女の官能は加速度的に狂わされていった。

「くっ……うッ、アアッン！」

真つ赤な顔で、吼えるように喘ぐ少女。まるで出口のない迷宮に迷い込んだ旅人のように、心が怯える。

「紫乃、抗うな。君の身体の中に入った情念は君の身体に巣くい始めているのだからね」

ドクドクッ、これ以上はあまりに辛すぎると思うほどビンビンに勃起したニップル。

そこへさらに血液がなだれこむ。血液の絶対量が増え、少女の身体を突き破ってしまうのではないか、甘い血液の流入に少女の情欲は燃え上がった。

（も、もう来ないでえっ、これ以上大きくならないでエ……！）

少女は拘束されたまま、ただただ悲痛な叫びを押し殺すことしかできない。

「あなたのような妖魔に、私は負けないッ。父さんの代わりに、もう一度あなたを討ち

——はうううッ!!」

少しでも身動みじろぎすれば、乳首に迸る鋭い電撃感。顎を反らし、美しい黒髪を振り乱し、



豊峰を見せびらかすようにブルブルと波打たせる。

「ンーッ！　ンッ……ンウウウ!!」

ピチャッ、チュピウウ。紫乃の股間部から、ねつとりと白濁した肉汁がショーツの吸水限度を超えて、染みだした。闇の空間に落ちる、女の官能液は光源もないのにキラキラと輝く。

（アア。何ていやらしいにおいな……）

立ち上る、己の分泌物の芳香が、いつも嫌悪感と共に終える自瀆を思い出させる。

（だめえ、いやらしいって分かっているのに、ああ……と、とまらないい）

完熟しすぎた果実が蕩けるように、自分の自我もくちゆくちゆの液体に——愛液になって、消えてなくなるのではないか。

（おまたの奥……熱いい、も……燃えちゃいそう……つ）

胎内に詰まった情蜜を燃料にして、淫らな火が一層強くなつていくようだ。少女はその精神力ではどうしようもない生理反応の前に、ただ赤子のように身悶えるしかできない。

「私に従えっ！」

深草は語気を強め、片手を握りしめた。

すると、紫乃の双乳の奥底にわだかまっていた熱が膨張し始めたのだ。

「えあつ、ううんっ!!」

ただでさえ大きく、重量感のある乳肉の異常に紫乃は目を白黒させる。まるで乳房が勝手に成長しているようだった。

「な、何これっ!？」

最初は単なる気のせいかと思っていた。しかし実際胸は大きく張り詰め始める。それと時を同じくして胸の聖気は曇り、淫気が強まってきていた。

「そんな、淫気が……聖気を食べて、膨らんで……ンンアアア!？」

胸の膨張に肺が圧迫される狂おしさが胸をつんざく。同時に胸の敏感具合が高まっているらしく、外気に撫でられるだけで揉まれるようないやらしい感覚が肌を奔った。

「ン、ンウ……!!」

ビリビリッ!

ただでさえ前段階で引き裂かれていた巫女服が胸の撓む勢いに圧され、さらに引きちぎれた。闇の空間に、小袖の切片がヒラヒラと散華のように舞い散る。そこで完全に二つのたわわな肉果実がブラという拘束具を振り外す勢いで、外へ飛び出た。

「ふうあ、ンっ」

ブルルルン、とゴム鞠のような弾力を見せる肉乳。まるで白桃のような球形を描き、さらに赤みが差したその様は、今にもかぶりつきたくなくなるような瑞々しさを全開にする。

「ふうっ、むう……」

膨張感は止まらず、胸に絡まったブラが深く双峰にめり込み、皮膚が灼けるような疼きが豊乳全体に広がった。

「うっ、うーんっ」

紫乃は柳眉を^{ひしや}拉げさせ、もどかしげに熱っぽいため息をついてしまう。

「もう少しか。強情だが一度気をやれば、少し己の淫らさに気付くだろう……」
 呟く深草は、神弓をその場に捨てる。

「な、何を……するの」

おぞましい深草の言葉に、紫乃は乙女としての己の怯えを吐露してしまふ。少女の瞳は膜が張りついたようにボォッと霞み、瞳に込められた強い意志も弱々しかった。

「さっきと同じことを今度は全身で味わう。お前の身体に入り込んだ私の情念が、紫乃の神経を狂わせるのだ」

「さっきのをもう一度!?!」

紫乃は全身を震えさせた。今も続く胸が内側から熱膨張する悩ましく、切なさばかりが堆積する狂おしさに、少女の繊細な神経は今にも引きちぎれてしまいそうなのだ。

「ンッ、アア」

胸が内側から圧されるような感覚に、ジワツと肺が熱く灼ける。

(ダメ……胸が……ああ、欲しく、揉んで欲しくなっちゃう……)

身体の異変は大きくなっていく。胸の脹らみとブラの押さえとの間で生まれる、押しあいへしあいだが、悦びが、喚起し始める。

「むううつ、アアツ……アアツ!!」

身体に一旦染み込んだ深草の禍々しい情炎が胎内で暴れ、心の均整が今にも崩壊しそうな肉の悦びが脳内へ遡ってくる。理性が霞みに曇り始めた。股奥が激発し、ドロドロに熔けていく。

「うツ……ああつ、ウウツ……」

神世の美人を思わせる無垢な容貌を切なく揺らめかし、紫乃は艶やかな呼気を繰り返す。ビッシリと汗をかいた横顔に、張りついた黒髪が十代の乙女とは思えないほどの妖しさを湧かせた。

「ムウツ……ア、アン……だめえ!」

性欲の源泉を身体に設けられたかのように、心が爛れるような熱気に少女はうなされる。「最後のチャンスだ、紫乃。私に身を捧げるところで誓え。どうせ奪われるのだから、自らの意志でな?」

深草は微笑しながら、内心では舌を巻いていた。普通の女なら気でも狂わんばかりの快楽が身心を苛んでいるにもかかわらず、少女は喘ぐものの無難に耐えているのだ。だがそれも終わりだ。あの唇のわななきを見る限り、気をやるのは間近なはず。

極細触手は牝狹間をわざと横断し、ふつくらとした肉丘を愛撫する。チユリチユリと恥毛を撫でながら、時にグイグイと押し、膣肉を甘く刺激した。

「アアッ……ウウッ」

紫乃は顔を真つ赤に、小刻みに身体を震えさせた。実力から見れば圧倒的に凌駕しているのに、汚らしい愛撫を施され悶えずにはいられない。そして身体はそれに馬鹿正直に応え、嬉しがつてさえいる。乳首に集まった血脈が躍り狂う。

「ダメエ、言わない……言うものか……」

紫乃は自らと戦っていた。讜言うわごとのように決意を呟くが、すでにその顔は真つ赤。脳内はコトコトに煮込んだ玉葱のように、今にも蕩壊してしまいうさうだった。

「先輩ッ、頑張つて!!」

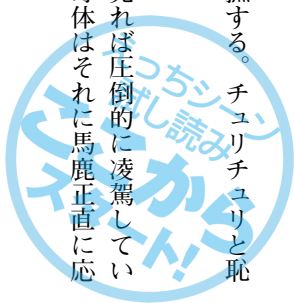
咲楽は堪え忍ぶ紫乃を勇気付ける。

「咲楽アッ……ウッ……あッ、ウウッ……」

血が流れ込みすぎてピンピンに膨れるニップル。そこは血が集まりすぎているのか鮮やかなピンクから、官能色の濃紅へ変わっていた。

(灼けるッ……からだアッ、燃えそうッ……)

まるで活火山の火口に蓋をしたようだ。炎を食べさせられたように、息するだけでビツクリするほどの熱が食道、肺、鼻奥を駆けめぐるので。もうどこからこの大量の血が噴き



出してもおかしくない。

それほど今の紫乃の身体は逼迫していた。

「フン、その顔……いつまで持つか……」

下腹を這い回っていた極細触手が、ゆっくり縦割に沿って動き始める。クチュ、ニチュ、と粘着物質をわざと掻き出すように動く。

「ンンア……よ、よせえつ……ンンア」

氣勢をそがれる、あつさり愛撫が少女の精神をさらに追い詰める。

（一体今度は何をするのっ!!）

巫女少女はあまりのおぞましさに歯の根が合わない。そして突然下肢で熱の塊が思いつきり弾けた。

「ヒィィーッ!!」

極細触手がすっかり脱皮した肉芽を突き刺したのだ。

甘美な電撃が、産道で炸裂した。豊潤な女体はあまりの衝撃に躍り、全身が蠟になったように、燃え上がる官能の狂焰の前でドロドロ蕩け始めた。

「ア、アアッ……!!」

「さあ、どうした？ 言いたいことがあるのだろう。妻の頼みだ、聞いてやろう」

ズブツ、ズブツ、ズブツ。深草は今にも破裂しそうなほど痛々しい肉芽を刺激し続けた。

すでに股間部からは堰を切ったように大量の甘蜜をだらしなく、吐瀉し続ける。

「アッ、アア……」

ヒリヒリした疼きが、ドロドロに細胞組織を蕩かし尽くす甘美な絶望に変わっていた。

「あううっ！ ダメエ……刺すなッ……ああつ、我慢できなくなっちゃうううっ!!」

紫乃は悩乱し、奥歯をガタガタと震えさせた。

「サア、お前の望みは何だ？」

「先輩、負けないでッ！ 負けないでくださいッ!!」

咲楽の懸命の励まし。しかしその言葉は遠くで聞こえた。比べて、深草の言葉は拡声器を使っているかのように耳のすぐ近くで怒鳴られているように、身体に染みついてしまう。

(も、もうダメエ……ああああ……)

紫乃は涙をにじませた瞳で咲楽を見る。紫乃は咲楽にそれで自分の不甲斐なさの詫びを示したつもりだった。

(ごめんねエ、……咲楽。私……あなたを護るために頑張った……けど、もう)

妖力はさっきの一撃で尽き果て、全身は度重なる焦らし責めと媚薬責めで愉悦に微睡みまどろ始めていた。

(ごめん……咲楽ア)

しかし咲楽は自分の応援が届いたのだと勘違いし笑顔を作り、眼で強く『頑張つて』と

エールを送った。

二人の気持ちの不一致を知るものはいない。しかしそれは次の瞬間で、兩人に埋められないほどの深い溝を造る。

「お願い……します。ああ、胸を……アアッ、乳首を……ア、ア……強く……！ ぐちやぐちやにシテエエ!!」

アアッ！ と紫乃は甘く鼻を鳴らす。触手が尻朶を大きく張ったのだ。

「ふあああんっ」

弱めのスパンキングだがその衝撃が子宮を穿つと、それだけで媚肉の中は情炎が噴き上がる。

「強く、何だ？」

「強く……あ、ああ……こねて、潰して……お願ひしますうううっ！」

巫女少女から涙が一粒落ちた。

父親の魂を汚してしまう、自己の不甲斐なさに少女は嘆息する。だがもう我慢できなかつた。

処女の肉体は、巫女という禁欲的で神聖という——作られた偶像の皮を脱ぎ捨て、『牝』という本能に忠実であることを選んだのだ。

「言っちゃった。アアッ、私は言った……こんな気持ち悪い敵に、言ってしまった……」

…!!」

甘美な震えがつま先から脳天までを貫く。これから自分の身に訪れる責めに、胸が高鳴った。それはまるで深草に恋心を覚えたかのように初々しい気持ち。

「ハハ、いいだろう。妻の頼みだ。紫乃よ。たつぷりと味わえッ！」

一際野太い肉触手が二本、鎌首をもたげ、一斉に肉球へ殺到した。

「アアッ、オオオオオオオオ……！」

グリグリッと乳首が拉げたかと思えば、一気に胸肉の中に押し込まれる。乳肉がビチビチと爆ぜ震える。

「潰れエッ、ヒイアッ!!」

紫乃は白目をむきだし、焦らしに焦らされた乳首の爆ぜる感覚に、顎を天井へ向けた。

「ハオオオオオオオオオオオオツツツ」

埋没する乳首がグリグリと磨り潰され、背骨を青白い電流が迸った。大きな漣が全身に共鳴し、頭の先から手の指先、つま先まで骨肉深く轟く！

「どうだ、エッチなおま○こにも欲しくないかッ!？」

ピクピク全身を痙攣させ、胸より与えられた極上の肉悦に意識を霞ませながら、少女は何度も何度もしつこいぐらいに頷いた。

「あひいッ、ほしいい……いイ……いイッ、ヒヤアイイッ!!」

快樂の大波が一度身体を襲えば、後はなし崩しだった。

「サア味わえよ、おま○この処女を私がもらってやるからなあっ！」

少女の四肢に絡みつく触手。すでに抗う術を失った少女は上下逆転、逆さに吊られた。

「ふひやあああ……！」

血の逆流が酩酊感覚を喚び、脳内がぐちゃぐちゃに掻き混ぜられるような衝撃に身悶えた。

「あ、あああ」

母親譲りの黒髪を振り乱し、ぼろ雑巾のように絡みついた退魔師としてのアイデンティティーである巫女服が哀れ涙を誘う。

「ヒイツ……ヒイツ」

大股に開かれた両脚の筋がヒクヒクと痙攣を繰り返す。

ショーツを取り払われると、そこは処女のものとは思えないほど愛液で爛れ、真っ赤な小陰唇を細裂から零れ出させていた。

「アアツ早くウウ……熱いの、おま○こ熱いのオツ！」

理性が好色な霞みで曇る。少女の魂は快樂の泥濘に囚われてしまっていた。魂は汚れを嫌い足掻くが、それがさらなる深みへ嵌まることになるのを知らない……。

グジュツ、ジュブツ！

「ンンンアアアッ！」

ホカホカに熱を内包して蕩ける肉壁をかき分けていく肉蛇。入り口を広げられただけで、凄まじい悦楽の炎が爆ぜた。

「ああ、い、痛いッ、ひいっ！」

痛みが股間部全体を切り裂くたび、被虐心がウズウズして、発作のように全身が跳ねた。
「エッチな汁……ああ、顔にかかっちゃうう」

逆さ吊りという辛い体勢で、自分の股間部から止めどもなく溢れる甘露汁が顔に。ピチャピチャ落ちてくる。愛蜜を溢れさせながら、触手はぐじゅぐじゅに灼け爛れた媚壁をかき分け、それだけで前後不覚に陥ってしまいそうだ。

「あ、アアア、ふ、深いいいッ!？」

痛みのせいか、歡喜のせいか、叙情的な黒瞳に涙をにじませる。

極太魔手は潤沢な愛液に助けられながら、処女の胎内を進んでいく。一つ進むごとに壁が潰され、被虐の輝きが瞼の裏で明滅した。

「ウウッ……フフウッ!!」

つま先がビーンッ、と反り返る。

「どうだ？ 初めての、おちんぼは気持ちいいかア？」

「い、イイッ、イイッ！」

ジーン、と下腹が痺れ、連続的な快美感に少女は額に皺を作つて、ブルブル打ち震える。「ああ、スゴッ……!! おお、あ、当たつて……アア、そ、そこお!」

憎むべき妖魔に孔を穿られながらも、野太い触手の生み出す魔悦に逆らえなかつた。

「クククッ、ここが紫乃——お前の処女膜だ。ほら、今どこに在るか、分かるかア?」少女は全身に玉の汗をかき、ガクガクと首を振つた。

「やめてつ、せ、先輩をッ! 先輩を、変にしないでえっ!!」

咲楽は紫乃の淫蕩な姿を見ていられないとばかりに、がつくりと四つんばいになつた。いや、本当は紫乃のもとへ駆けつけようとしたが、両足首を触手で拘束されているのにも気付かず、転んでしまったのだ。

「こ、ココッ! 今あ、……ここ!」

牝フェロモンを発する両乳をグリグリ刺激されながら、紫乃は自分の臍近くを指さした。「早く、奥ウツ、奥ウツ、つら……貫いてエ!」

目元を赤くさせ、口元をほころばす。堪らなかつた。膣粘膜を火で炙られるような摩擦感の強烈さに、声の震えが治まらない。

グググッ、肉棒の先端が産道へ蓋をしていた、膜へ体重をかけていく。

「ソラッ」

ピリイッ!

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>